

「ありがとう、  
ありがとう。  
ありがとう、  
先生！」

第2話

當眞嗣朗

「ありがとう、ありがとう。ありがとう、先生」

## 第二話

當眞嗣朗

夜が明ける頃、彼らは去っていった。正午過ぎにバットから連絡があった。いろいろ当たってみた、と彼は言った。彼の中学の時の同級生に何人か会った。じっくり話を聞いてみたが、結論から言って、彼は誰からも愛されていないよ、とバットは言った。

「愛されていない？」と、トウマは言った。

「そうだ」と、バットは返した。「彼のことを好ましく思っている人間は少なくとも同級生の中にはいない。何故か聞きたいか？」

「まあね」

「その説明をする前に見てほしいものがある。波の上の

倉庫街だ。そこでお前のよく知っている男が働いている。

声をかける必要はない。ただこっそりと、その様子を見てきてほしい」

トウマは唸った。それは出来れば避けたい、と申し出た。

「言っておくが」と、バットは言った。「お前に選択の余地はそれほど残されていないんだぜ。お前はサーブされたものを美味しいと言って食べなければならぬ。それが例えどんなに不味いものであっても」

トウマはその時間が来るまで、男が高校生の頃に勤めていたというコンビニエンスストアの店長に話を聞くことにした。その店は経営難を理由に廃業していた。本部に連絡をして、どうかその元店長の居場所を突き止めた。彼女はある福祉施設で働いていた。休憩時間にそのロビーで話を伺うことが出来た。

「彼はきつと、特別に優秀だったわけじゃない、と思うの」と、彼女は言った。「平均よりは上といったところかしら。仕事はきちんとかこなすわよ。それはコッチが感心するくらいきちんとやるわけ。でもね、彼はきつと、馬鹿みたいに素直だし、とにかく彼はきつと、自分をちゃんと評価できないトコがあつたの。良い意味でも悪い意味でもね。人間、それなりの時間を生きてるとき、自分ってものが判るでしょ？ だいたいは。でもね、彼はきつと、自分がどこまで出来て、どこから出来ないのか、たぶん、まったく判っていないトコがあつたの」

その女は居心地が悪そうに椅子の上で身体をもじもじと動かしだした。

「わたしはね、長い間、水商売をしてたの。そう、バーのホステス。そういう仕事をしてるとね、いろんな人間、見るじゃない。わたしの場合、若い娘たちとは違うから、

お客さんに人気は出ないわよ。それに世話をするお客さんの年齢層も自然と高くなるから、若い娘たちみたいに元気ってわけじゃないの。でもね、水商売は水商売でしょ。この仕事に若い若くないの区別はないの。皆、スケベなの。それが目的。その欲求を満たすために皆、集まってくるわけ。でもね、ホントに寂しい気持ちを満たすためにやってくるヒトもいるわよ。そういうヒトをわたしたちは『理由あり』なんて呼んで、あまり深入りしないようにするの。でもね、若い娘たちの中には同じように寂しいって気持ちを抱えているヒトがいてね、そういうヒトと深い仲になる場合もあるわ。結婚しちゃったり。でもね、人間の本質はスケベなの。スケベ、スケベ、大スケベ。彼はきつと、ムツツリタイプよね。スケベなのは間違いない」

「男の事を一番よく知ってるのはやっぱり女でしょ。それ

も水商売の女はいろんな事を知ってるの。だからね彼はきつと、わたしは、あの男の事もよく判ると思う。あの手の男は絶対、飲み屋なんかに来るようなタイプじゃないの。判りやすいスケベじゃないから、ムツツリだから。酒を飲む金があればね、自分の趣味に注ぎ込むんじゃないかな。でね、普通のヒトがルーズな所で、彼はきつと、徹底的に頑張っちゃうの。どういう事か判る？」

「いいえ」と、彼は答えた。

「要は頭が良いのよ。普通のヒトより知恵が働くってゆうか、自分の手に負えないものは絶対駄目だって判ってるんだよね。そういう人間はね、ホステスなんか相手にしないの。水商売をやってる時、いろんな男、見るじゃない。皆、違わずに、スケベでした。ホントのホンキでスケベでした。女の身体を触ってくるような判りやすいスケベもいれば、何考えてるのか判らないスケベもい

たわね。普通の人間も偉い人間も、皆、スケベなの。変態なのよ。だから彼はきつと、彼に初めて会った時、コイツはどんな種類のスケベなのかって考えたの。わたしの採用・不採用の基準がスケベなので。でも彼はきつと、なんか、判らなかつたのよ。ムツツリつてのは見て判るんだけどね。マネージャーに相談して、とりあえず採用したわ。スタッフとして接していて、思ったのは、遠いヒト、って感じだったの。どういう事かって言うと、近くにいっても遠くにいるように見えるわけ、あのヒト。心が離れてるって意味じゃないわよ。どこかね、正体不明、みたいなトコがあるわけ。例えばね、商品の賞味期限のチェックをお願いするでしょ。コンビニつてトコは、商品の鮮度を大切にすから、実際に賞味期限の切れるずっと前に、商品を店頭から片付けちゃう場合があるの。そういうのが本部の方針なの。彼はきつと、それをお願いするとね、彼は指示された場所を決められた時間通り

に終えるの。そんなの当たり前って思うでしょ？ でもね、コンビニってトコは、従業員の年齢層が低いじゃない。そうなると人材にもバラツキが出てきて、熱心なヒトとそうでないヒトの差が出てしまうの。もちろん今は、オジサンがコンビニでバイトしてたりするわよ。不況だから。一昔前のコンビニって若者の象徴だったけど、今じゃただのライフラインでしょ。でもね、それでも人材の落差は出るわけ。それも高いレベルの落差じゃないの。もっと低いレベルの落差なの」

「彼はきつと、随分高いレベルで仕事をやるのよ。それで最初の内は感心してたの。でもね、そのうち判ったの。彼はきつと、誰かに怒られたって経験が、他人に比べて少ないだけなのよ。たぶんほとんどない。彼はきつと、極度に恐れていると思うのよ。怒られるって事を。だから、なんでも先手を打って問題を解決しようとするのよ。」

怒られる前に、怒られたくないからなんとかしようって。彼はきつと、そういう所があるのね。それは高い能力の表れだと思う？ わたしは違うと思う。前ね、ホステスしてた時、あるお客さんが、会社を経営しているヒトだったんだけど、言ってたの。ヒトを簡単に信用するんじゃないよって。信用出来る人間ってのは、社会から邪険に扱われてきたヒトで、そういうヤツは大抵、そうとう怒られている、だから耐えるということを知っているし、自己評価が正當なんだって。かえって、怒られていない人間っていうのは、やることに根拠がない、そういうヒトは本なんか読んで判ったような顔するけど、それは体験から得たものではなくって、また、怒られそうになると真っ先に逃げるんだって。それでね、彼は言ったの。この世界には砂漠があるでしょ。水も植物もろくにない世界。その砂漠の事をいろんなヒトが案じているわけでしょ。このままじゃ自分の住んでいる所もああなるんじ

やないかって。でもね、誰も本気で環境問題について考えようとはしないわけ。今日、自分が排出する毒が、どこかで誰かの不利益になるなんて誰も考えない。ヒトとヒトは目に見えない鎖で繋がっているのね。何故って、それを考えようとすると、自分ひとりだけが損をするからよ。怒られるって事も本質的には一緒なんだから。誰も、怒られるという貧乏くじを引こうとしないでしょ。怒られた経験の少ない人間ほど、それには敏感らしいの。彼はきつと、その敏感なヒトなのよ。それで、わたしの目には、誰とも繋がっていない自由な人間のように見える。生きてるって事をエロスって言うんではない？ 判んないけど。そのエロスを隠して生きてるの、彼はきつと。ムツツリなのよ」

彼はきつと、彼はきつと、というその女の口癖を頭の中で反芻しながら、トウマはバットが指定した場所を目

指して歩いた。あの女は、悪いヤツではない。しかし彼はどうも好きになれなかった。もちろん仕事としてやるのだから文句はいえない。それでも、彼女の言う、スケベ、スケベという言葉が彼を苛立たせた。その俗に塗れた言葉が彼女の世界を成り立たせているのだ。そう考えると、異様な気持ちになった。多くの人間がスケベだとして、俺はどうだろうか、と考えた。もちろんスケベだろう。確かにそれはそうだ。俺だって、性的な妄想にとられる時はある。しかし誰かに自分の事をスケベ等と言われていると考えると腹が立った。それに、世界中の人間がスケベだと言われる事も我慢ならなかった。

バットが指定した場所は倉庫街の一角だった。トウマは高校を卒業してすぐ、波の上の倉庫街で短期間のアルバイトをした経験があった。求人誌で見つけた仕事で、重労働だった。重い荷物をひたすら運ぶ仕事で、身体は

すぐに根をあげた。それでもやり遂げることが出来たのは単純に若かったからだ。その時に感じた倉庫街の空気を感しながら指定された倉庫の傍に行き、停車された自動車に身を潜めて、倉庫の中を窺った。

すっかり色の褪せた野球帽を被った一人の男がいた。

彼は痩せていた。しかし適度な場所に充分な量の筋肉がついているのが判った。そういう身体付きをしている人間は大抵、肉体労働をしている。それも農業だ。トウマにも経験があったが、あれはかなりの重労働だった。鍬を振るって土地を耕すのも大変だし、作物の管理にも気を遣う。そして収穫の際になるとまた体力を使うのだ。俺には向かない、と考えて、それ以来、畑仕事をした事はない。それでも、心の中では農業に従事する人間を尊敬していた。そして今、トウマの目の前にいる男は、彼の知っている農家の人間だった。同級生だった。

彼は農業をやりながら、時間を見繕ってここでアルバイトをするのだ。彼がやっているのは教科書の梱包作業だった。書類入れ程度の大きさのダンボール箱に、学校から指定された数の教科書を伝票と共に入れてガムテープで封をする。それを夕方に回収にやってくる運送業者のトラックに積み込むのだ。それが膨大な量ある。教科書の数も膨大なら、学校に通う生徒の数も膨大なのだ。

それはかなりの重労働だった。教科書というのは本で、本というのは紙の束だ。それが集まるとかなりの重さになる。それを一つひとつ仕分けし、運ぶというのは、体力の限界に迫る仕事だった。本を作るヤツラは涼しい顔でパソコンのキーボードを叩いている。しかしその本を流通させる側は必死の形相なのだ。それをトウマの知っている男は黙々と続けていた。数名の仲間がいて、彼らはそれぞれに年齢が違うが、顔つきが一緒だった。それ

は、生きる事に必死という事だった。

なるほど、とトウマは思っ、ため息をついた。バツトはこの様子を見せたかったのだ。まずはこれを見ろ、と彼は言いたいのだ。話をその後だ、と。その後、バツトから電話があつた。彼は電話口でこう言った。

「彼の同級生の何人かに実際に会って、話を聞いた。実いろいろな話が聞けたが、全体的なトーンはみんな一緒だ。結論から言うと、彼はかつての同級生たちに相当嫌われている」

トウマは喉の奥で唾液がその密度を増すのを感じた。バツトは言った。

「彼らが言うには、あの男は仲間じゃない、ということだ。あの土地は随分、保守的な土地だ。そして保守的な土地が多くの場合そうであるように閉鎖的だ。共同体は強固で、それはまるで集落の周りに築かれた巨大な壁を

思わせる。余所者はその壁を越える事が出来ないし、内部の者が余所に出て行く事も難しい。集落の人間はそこで一生を暮らし、そして集落の人間として死んでゆく。

それが当たり前なんだ。しかし彼は、その集落に生まれながら、内部の人間と交流を持つとうしなかった。彼は仲間とつるむような事をしなかったし、愉しく談笑する事さえなかった。別に家の門を閉ざしていたわけじゃない。彼はそこから自由に外に出ていたし、余所の土地に買い物に行く事もあつた。しかし彼らが言うには、彼は俺たちを馬鹿にしていた、という事だ」

「馬鹿にしていた？」

「そうだ。判りやすく言うと、見下していたという事かな。もちろん実際に彼がそう考えていたのかどうかは判らない。彼らが勝手にそう解釈している場合だってあるさ。ただ、彼は地域の清掃活動などにも参加しないし、



地域の行事にも参加しない。共同体の内側にいる人間にとっては、面白くない存在だった事は確かだね。彼らは言う。あいつは、皆が集まっている所にやっこない。皆が愉しんでいるのに、それを無視している。そういう輪を乱すヤツなんだ、と」

「俺にはよく判らないんだけど、そういうのって駄目なのかな？」

「駄目なんだろう。さっきも言ったように、共同体の人間が壁の向こう側に出て行くのは難しいのさ。なにしろ皆が監視して足を引っ張り合っているからね。ただ、俺はそう言われている彼の事を考えると気の毒に思う。そういうのって辛いんじゃないかってね」

「皆に嫌われる事が？」

「そうだ。彼の事を好いている奴は、恐らくどこにもいないのさ。お前は缺の存在理由を知っているか？」

「いや」

「それは何かを切るためにあるんだ。それ以外の目的には使われない。缺の事が特別に好きだという人間もいない。ネットで缺について検索する奴もそういないさ。用のない時は完全に無視される。それが孤独な人間の特徴だよ。しかし孤独と縁のない人間は用がないときでも声をかけてもらえる。例えば、本業とは別に良い短期のアルバイトがあるからやらないか、だとか。皆、生きるのに必死だ。たまに倉庫で働いたりする。孤独とは相容れない知人の紹介でね。しかし孤独な人間にはそれはない。一人でなんとか生きていくしかない。誰も訪れる者はいない不幸なホームページとして。象だって相手にしないよ」

「もう一人、お前に会わせたいヒトがいる」と、バットが言った。

その女は実年齢よりも老けて見えた。六十を超えて英会話を習いはじめたが、長続きしなかったという。少し根気が足りないのだろう、とトウマは思った。でなければ、執念のようなものが不足しているのかもしれない。女はまるで抜け殻のように見えた。多忙な教員生活から解放された途端に魂が羽化して、身体を出ていったとでもいうかのように弱い。頭髮はすでに白い。この年齢だと白髪を恥じて黒く染める女性が多いが、彼女は誰かに自分が見られることを意識していないようだった。小太りで、顔には染みや皺が目立ち、何かヒトには言えない重い荷物を背負っているかのように背中をまるめて、窮屈そうに椅子に腰かけていた。彼女が待ち合わせに指定した喫茶店に姿をあらわした時、トウマはその女を認識できなかった。元教師だとは思えなかったからだ。声をかけられて、慌てて挨拶をしたが、世の中を恨んでいくようなその風貌に彼は言葉を失いかけていた。

「あの男の事はよく憶えています」と、女は言った。喉を水没させたような酷く不明瞭な響き方のする声だった。「忘れられるはずがない。今、わたしが不幸なのはすべて、あの男の責任と言っても過言ではないの。長い教員生活の中で、ああいった手合いの人間に出会ったのはあれつきりだし、もしあの男と出会わなければ、考えても仕方ないけど、わたしはもっと幸福に毎日を過ごせていたと思う。わたしはあの男が憎い。あの男と出会わなければ、わたしは自分を殺したりなんかしなかった」

そう言って女は、「ぐう」とも「うう」ともつかない声を発した。頭の中で迷子が泣きながら彷徨っているような口調だった。一瞬でも気を抜けば、横に転んでしまいうような話しぶりだ。長い隠遁生活の中で彼女は、あまりにも社会から離れ過ぎてしまったのだろう、とトウマは

感じてため息を吐いた。彼女は自分を殺した。つまり、世間的には死んだ事にして、ヒトとの繋がりを一切絶つてしまったのだ。それもすべてあの男のせいだという。

「あの男はとっても大人しい生徒だったわね。どんな生徒にも多少は友達らしい友達がいるけど、あの男にはいなかった、一人も。それを気に病んでいる様子もなかった。普通、みんな、友達の数って気にするでしょ？ よくちっちゃい時に『友達百人できるかな』って歌習って、それを実際の学校生活で実践しようとするでしょ？ そういうのって当たり前だから。当たり前前はやって当たり前前だから、皆。でもね、あの男、ちよつと違うの。休み時間なんかね、いつも一人で席に座って、図書館から借りてきた本を読んでいるの。一度、何を読んでいるの？ って訊いた事あったわ。そしたら、『何故、戦争は起きるのか？』って答えるの、フロイトだよって。

何よソレって思った。思って、それで、馬鹿じゃないかって思った。でもね、あの男、読書が好きってわけじゃなかった。暇を潰すために仕方なくやってるって感じだった。成績が特別に良かったわけじゃないわ。中の下とあったところ。あまり勉強熱心でもない。数学や英語なんて、テストをしたら、まるでデタラメな答え、書いてくるし。でも国語はマシだったわね。運動が苦手で、体育だけは、クラスでも最低ランクの成績！」

つづく